

出動せず

「遺訓」心に耐えて

この連載ではまず1995年の地下鉄サリン事件を取り上げた。事件後の不測事態について部下が対処計画を見せたとき、当時の陸自トップ、陸幕長の富澤暉(76)はなぜ、「T(治安出動)を消せ」と命じたのか。その意味が、彼の半生を聞くうちによくみえてきた。

70年安保の前。三島由紀夫が自衛隊を国軍にしようと呼び起した。富澤は「我々は役人ですから」とあっさり断った。作家の熱情は分かる。だが、自分たちは国民に奉仕するのだという自負があった。そこが原点。



平間洋一・元海将補

毎日新聞ニュースサイトで会員登録していただくと、連載の1回目から読むことができます。

の地下鉄が狙われた……。

ふり返ってみると、富澤のかたくななまでの「従順さ」が伝わってくる。敗戦後、国民の強い反戦・反軍意識の中で、自衛隊という存在をなんとか根づかせたいという思いがあった。熱を帯びた言葉に感わされぬ。自分で思い描く正義や理念は保留する。そしてひたすら、国民に認められたいと願う。決して法律を逸脱しない。だから、権限のない「T」は計画書にあってはならなかった。

連戦冒頭で紹介した、吉田茂が防大1期生に与えた「遺訓」を、私は思い出す。△日陰者だが……耐えてもらいたい。4期生の富澤もたぶん、耐えてきたのだ。背景を知りたい。吉田はどんな経緯で、あの言葉を残したのか。実は、吉田自身が「書き残した」言葉ではない。卒業アルバム編集長だった1期生の平間洋一・元海将補(80)が、卒業直前の57年2月、神奈川県・大磯の吉田邸に呼ばれたときの「聞き書き」である。

自衛隊幹部の養成学校創設に腐心してきた吉田である。どんな学生ができたかみたい、という要望で実現した。心接間に通され緊張して待っていた平間ら学生3人の前に、新聞の風刺漫画そのままの和服、白足袋姿が、葉巻をくゆらせながら現れる。そして、大物議員を控えるの間で待たせたまま、吉田は上機嫌で、一方的に話し始めたのだ。

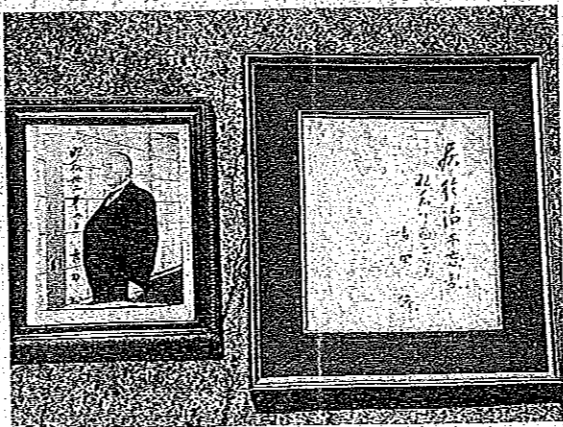
戦後70年に向けて 文 写真・滝野隆浩

出動せず

色紙に「乱を忘れず」

米国は日本に戦争放棄をうたった憲法を与えた。憲法公布は1946年。そのわずか4年後に警察予備隊の創設を求めたのもまた、米国である。再軍備を強く迫った戦勝国に対して、「復興優先・軽軍備」の方針を貫いたのが、敗戦国の首相、吉田茂だった。

平間洋一(81)ら防大1期のアルバム委員3人が卒業間際の57年2月、神奈川県・大磯の自宅に呼ばれた。「軍部嫌い」で知られる吉田は、話し始めると止まらない。「陸軍の連中はものわかりが悪い。だから僕は陸軍が嫌いだ」「防大の校長を決めるにはずいぶん考えたよ。昔のよう軍人をつくらないためにね」。国防問題では本音も出る。「アメリカが守ってやるというのだから守ってもらえばよいではないか。世界に自分の国だけで守れる国などない。自主防衛なんてチャラチャラおかし」。徹底して名より実を取る。まさに、保守の論客、高坂正典(故人)のいう「商人的国際政治観」(「宰相(故人)のいう「商人的国際政治観」」)



吉田茂から写真と色紙が送られてきた一平間・元海将補提供

毎日新聞ニュースサイトで会員登録していただくと、連載の1回目から読むことができます。

相 吉田茂)だ。

すぐに2時間が過ぎた。「学生たちに何か食べさせてやんなさい」と家人に命じる。学生たちが応接室から出ようとしたその時、吉田も立ち上がり、あの言葉を述べる。△日陰者だが……耐えてもらいたい。平間がその言葉の重みを感じるのには、ダイニングに用意されていた大阪すしで腹を満たしたあとのことだった。

海将補で退官後、防大教授として海軍史を教えてきた平間は、論文「吉田茂と自衛隊」(95年)を仕上げた。吉田は政治に干渉した軍閥、軍国主義を憎む一方で、民主主義の軍隊を育成することに心を砕いた。ただ当時は反戦・反軍一色だった世論に配慮し、「再軍備には反対」「自衛隊は戦力なき軍隊」などと言いつつ、だが自分が心を砕いた防大の、初めての卒業生との面談で、最後に「本音」が出たのだ。

吉田茂が好きですか――長い取材の最後に、私は聞く。「うーん」と少し考えたあとに、平間は言った。「現実主義者として、当初、再軍備に反対したのは仕方なかった。だけどその後、日本を見て、吉田は焦ったのだと思う。うめき回るようにして手紙を書きまくっている、自衛隊を日の当たる場所に出せ、とね」。卒業の直前、アルバム用にと頼んでいた写真が吉田から届いた。同封の色紙には、「平和な時に乱世への準備を怠るな」という意味の入治に居て乱を忘れず」とあった。

戦後70年に向けて 文・滝野隆浩